

ガラス製の大型アート造形物を内製化

クレーンと研磨機等の導入により、ガラス製の大型造形物が制作可能に。研磨作業の内製化により、海外への技術流出も防止。アーキテクチュアガラスアートの内製化を実現し、アーティストののびやかな感性を設備の制限なく表現可能に。

大型ガラス造形物の移動や研磨が可能に

アーキテクチュアガラスアートを制作する工程で、大きくて厚いガラスを何枚も接着したガラス造形物を工房内で移動させる必要があるのですが、これまでは人力に頼っていたため、移動が困難な大型の造形物は受注を断念したり、デザインにも制約がありました。また、ガラスの移動には危険が伴いますし、首や腰を痛めることも日常的でした。

今回の補助事業で1トンを持ち上げるこ
とのできるクレーンを導入したことで、制作中の作品を少人数で安全に移動することができるようになりました。

また、これまで研磨作業の多くを外注していたため、コストがあがるだけでなく、仕上りの不安がありました。研磨機を導入し、研磨作業を内製化したことでコスト削減と審美性が確保できました。

外注する場合は、安価な海外に依頼することが多かったため、お金だけでなく技術

補助事業のきっかけ

各加工設備への移動や位置変換は今まで人手で行っていた。人手で2～3メートルの数十枚接着したガラスの移動は危険が伴うとともに限界があった。クレーンを備えた工房にしたいという強い思いから、補助金を申請。また、研磨作業のすべてを外注していたため、コストが高く、品質にも不安があった。研磨作業内製化のために研磨機の購入も合わせて申請した。

事業概要

芸術性の高いガラス製の大型造形物（ガラスアート、ステンドグラス、モニュメントなど）を制作するための設備を導入。クレーン、サンドブラストマシン、切り台を第2工房に設置した。クレーンと切り台により安全かつ効率的にガラスの移動ができるようになり、サンドブラストマシンにより作業時間が短縮できるようになった。研磨機を第1工房に設置した。研磨機の導入により、研磨作業の内製化と審美性の確保ができた。

事業化状況

大型ガラスの造形物のコンペにも参加できるようになった。ガラス研磨の行程を内製化でき、コスト軽減と仕上げレベルの向上が可能となった。国内・海外で引きあいがあり、商談中の案件が複数ある。海外はアジアの案件が多い。補助事業後はジャカルタに大型の水盤を納品。

事業テーマ

ガラス製大型造形物の制作に係わる設備の導入

事業者名

マリエンバード工房株式会社

Company Profile 企業概要



日本におけるアーキテクチュアガラスアートのパイオニアである野口眞里氏が、父の工房で5年、ガラスアート会社で13年経験を積み、2002年にマリエンバード工房を創業。ガラスアートの企画・制作・販売を行っており、公共施設・ホテル・商業施設などに数多くの作品を納めている。野口氏はガラス面に砂を高速で噴出させて彫刻を施すサンドブラストエッチングと、複数のガラスを接着する積層接着という技法を使い、顧客の要望に応じてデザインを提案し受注生産を行っている。横浜駅東口地下街ポルタの大階段エントランスやザ・リッツ・カールトン東京のチャペル等の実績を持つ。海外を中心として大型造形物の引き合いが増えている。

代表者名 野口眞里
設立年月日 平成14年2月
所在地 〒233-0003 神奈川県横浜市港南区 港南5-19-22
従業員数 5名
資本金 1,000万円
Tel. 045-846-2387
Fax. 045-843-2213
http://www.mari-and-bird.jp/

Examiner's Eye 調査員考察

設備投資により、大型ガラス造形物の制作を可能にするともに、研磨工程の内製化でコスト削減と技術の海外流出を防いだ事例。デザインの制約がなくなり、コストを削減できたため、新しいことに挑戦することができるようになり、アーティストの豊かな感性を発揮できる設備が整った。作品に満足せず、呻吟しながらよりよい作品の制作に挑んでおり、今後の活躍にも大いに期待したい。



▲研磨機の操作風景



▲切り台を使用した作業風景

アーキテクチュアガラスアートを広めたい！

も海外に流れていました。研磨作業の内製化により、技術の流出を防ぎ、日本で技術を育てることができるようになったのがよかったです。アーティストののびやかな感性は制作中に発揮されるので、研磨作業の内製化でよりよい作品ができると期待できます。

日本ではまだ建築と一体となったガラスアート（アーキテクチュアガラスアート）が普及していません。地震が多く、ガラスは危険なもの、贅沢なものという先入観が強いのがその要因です。しかし、東日本大震災で建物の壁面に亀裂が入っても、マリエンバード工房が納品したガラス造形物は無傷でした。震災後、全ての仕事を失注しましたが、横浜駅東口地下街ポルタの大型エントランスのコンペに選ばれたことがきっかけで、ものづくり補助金に応募し、大型造形物の制作ができる体制づくりを目

指しました。設備の導入により、提案できる造形物の大きさやデザインが広がり、引き合いが増えていくアジアを中心とする海外顧客の要望にも応えることができます。今後の夢は、建築中の段階で造形物を入れることで、アーキテクチュアガラスアートのジャンルを確立し、建築物の企画の段階から提案できるようにすること。建築と一体となったガラスの可能性を追求し、ガラスが作る美しい空間の設計をしていきたいです。



▲代表取締役の野口眞里さん